

都道府県番号	幼保連携型認定こども園にしぼる外3園	R1~R5
--------	--------------------	-------

令和5年度研究開発自己評価書

I 研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

① 幼保連携型認定こども園教育・保育要領における全体的な計画と教育課程の位置付け

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂では、入園から修了までの幼児の園生活全体を捉えた「全体的な計画」の作成が位置付けられた。全体的な計画には、満3歳以上の幼児の教育課程に係る教育活動のための計画、0歳から小学校就学までの保育を必要とする幼児の保育時間の計画、安全計画、保健計画、災害計画、保護者に対する子育ての支援に関する計画等が含まれるが、幼児にとって園生活がよりよいものになるように、教育と保育の内容等の関連を図りながら調和と統一のとれた計画とすることに配慮した。

幼保連携型認定こども園の教育は養護と教育を一体的に行うことを認識しながら、本研究は主として教育的な側面に焦点を当てるものである。本研究に係る教育課程は、「全体的な計画」の中に位置付けた。即ち、3歳以上児は「教育課程に基づく教育活動のための計画」、3歳未満児は「保育のための計画」に位置付けた。また、3歳未満児は、「保育のための計画」の教育の部分に焦点を当て、「教育課程」と表現した。幼児の発達を見通して、「3つの資質・能力」「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「5領域のねらい、内容」を関連付けながら編成し、教育課程を具体化した長期、短期の指導計画においてもそれぞれの計画との関連を図った。「養護」に関しても、教育課程の区分で計画を作成し、各指導計画に位置付けた。そして、本園教育目標の実現を目指し、養護の行き届いた環境を園生活の基盤として、教育及び保育を展開することに留意した。

② 育ちや学びの連続性及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた教育課程の編成

本研究では、幼児の育ちや学びを、各領域のねらい及び内容とともに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」）の視点からも読み取り、一人ひとりの発達に必要な体験が得られるように教育課程の編成や指導の工夫を行うことを目的とする。幼保連携型認定こども園の特色を生かして、0、1、2歳から3、4、5歳までの学びや育ちの連続を図る教育課程の編成、指導計画の立案、ねらい及び内容の設定、環境構成の工夫を行う。3歳児から5歳児、未満児から3歳児へと連続した姿を具体化し、5歳児は、小学校教育につながる保育にも留意して編成に取り組んだ。

2歳児以降は期別（Ⅰ期～Ⅳ期）の教育課程、0歳児、1歳児は月齢で教育課程を編成した。さらに、2歳児は、年度当初、2歳0ヶ月から2歳11ヶ月の幼児が在籍しており、発達に大きな開きが見られる。育ちや学びを保障するために、Ⅰ期（4月から6月）とⅡ期（7月から9月）は、4月から9月生まれと10月から3月生まれに分けて教育課程を編成した。指導計画においても、同様の考えでねらい、内容を設定し、幼児の姿に基づいて再設定した。マネジメントサイクルを機能させて日々の保育を積み重ね、幼児の姿から月、週、日の指導計画、及び保育の工夫・改善につないだ。

(2) 教育課程の内容は適切であったか

① 0歳児、1歳児の教育課程の編成及び指導計画の作成

0歳児、1歳児は、月齢で編成した。0歳児は、教育に関しては、「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちが通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」の視点からねらいを設定し、内容は3ヶ月毎（3ヶ月から6ヶ月、7ヶ月から9ヶ月、10ヶ月から1歳未満）に区分して設定した（表1）。養護に関しては「生命の保持」「情緒の安定」についてのねらいと内容、配慮事項を設定した。

1歳児は、5領域からねらいを設定し、内容は3ヶ月毎（1歳から1歳3ヶ月、1歳3ヶ月から1歳6ヶ

表1 0歳児 教育課程「教育に関する事項」

Table with 3 columns: 3ヶ月～6ヶ月未満, 6ヶ月～9ヶ月未満, 9ヶ月～1歳未満. Rows include 'ねらい', '指導内容', '教育内容'.

表2 1歳児 教育課程「教育に関する事項」

Table with 4 columns: 1歳0ヶ月～1歳3ヶ月未満, 1歳3ヶ月～1歳6ヶ月未満, 1歳6ヶ月～1歳9ヶ月未満, 1歳9ヶ月～2歳未満. Rows include 'ねらい', '指導内容', '教育内容'.

月、1歳7ヶ月から1歳9ヶ月、1歳10ヶ月から2歳未満)に区分して設定した(表2)。

月別指導計画は、ねらいを月齢で2区分して設定し、内容は3ヶ月毎に4区分して設定した。0歳児学級で満1歳を迎えた幼児については1歳児の教育課程を適用した。養護に関しては、ねらいは学年同一であるが、内容は月齢に応じたものを記入した。

また、在籍児の氏名と前月の姿を記載

し、保育後に「幼児の活動」欄の各事項に育ちが見られた幼児の氏名(本稿では、イニシャル)を記入した。これは、当月の評価を翌月の指導計画の作成に活用しており、指導と評価の一体化につながった(表3)。

1歳児学級においても同様の方法で作成し、満2歳を迎えた幼児については2歳児の教育課程I期(9月～12月生まれ)(4月～8月生まれ)を参考にして月別指導計画を作成した。その際、2歳児の教育課程をそのまま当てはめるのではなく、参考にしながら1歳児学級としてのねらいや内容を設定することにより、2歳児の前倒しの指導計画とならないよう配慮した。表4は、教育課程と指導計画の関連を示したものである。

表3 0歳児学級 月別指導計画例(4月)

Table with 5 columns for months: 4ヶ月～6ヶ月, 7ヶ月～9ヶ月, 10ヶ月～1歳0ヶ月. Includes 'ねらい', '教育内容'.

表4 「0歳児、1歳児の教育課程と指導計画の関連」

Table mapping education courses (0歳, 1歳, 2歳) across months (3月, 7月, 10月, 1歳) with arrows indicating relationships.

② 3歳児、4歳児、5歳児の教育課程(期別)の編成

編成した3歳児、4歳児、5歳児の教育課程を各学年に具体化した「期別の教育課程」を編成した。期別の教育課程は、「年間を通して達成を図るもの」と「期別で達成するねらいと内容」で構成し、より実効性のあるものとした。その際、次項④「『幼児期の終わりにまで育ててほしい姿』の育ちの過程」も参考に、内容を設定した(実施報告書要約参照)。多くの内容を記載しているが、5領域の内容は保育を通して総合的に育つものであり、全てを各月の指導計画に網羅するのではなく、指導すべきことを保育者が把握して保育を計画し、実践することに留意した。

③ 発達別「マンスリープラン・エピソード」による教育課程・指導計画の見直し

月別指導計画に沿って保育を行い、月1枚のエピソード記録と可視化した「マンスリープラン・エピソード」(月間の子どもの主な活動の様子や学びを「10の姿」から評価したもの)により、教育課程の有効性を検証している。個人に視点を当ててきめ細かく読み取り、可視化することにより教育課程が具体的にイメージされ、見直しや次年度の指導計画に活用しやすく、「10の姿」の視点から幼児の育ちを読み取ることが保



図1 マンスリー・エピソード例「5歳児 8月」

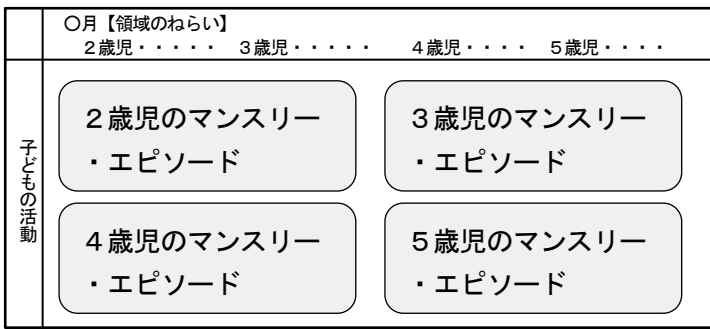


図2 発達別のマンスリー・エピソード

「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』育ちの過程（表5）」を作成した。2歳児、3歳児、4歳児は「10の姿につながる学び」とし、「自立心」「協同性」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」は、発達を考慮して園独自の表記をした。整理した「10の姿」から、各学年の幼児の育ちを読み取り、「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』育ちの確認表（3歳児から5歳児）」作成に活用した。

表5 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」育ちの過程

	健康な心と体					自立心					協同性	
	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	2歳	
4月	・保育者に安心感をもち、安定的な気持ちで過ごす。 ・走り回り、体を動かす。 ・身の回りのことを自分でできた喜びを感じる。	・新しい先生や友達と一緒に過ごすことを喜ぶ。 ・保育者に安心感をもったり、園生活の楽しさを感じたりして、園生活を楽しむ。 ・体を十分に動かして遊ぶ。 ・自分の好きな遊びや、好きな遊びの仕方をする。	・新しい環境で、先生や友達と遊びながら楽しむ。安心して生活する。 ・興味のある遊びや活動に積極的に参加し、手を足を入れ、巧みに動かすことができる。 ・自分の好きな遊びや、好きな遊びの仕方をする。	・自分で考え、行動したり年下の園児に声を掛けたりして、年長になった喜びや自信を感じる。 ・年長になった遊びや活動に積極的に参加し、手を足を入れ、巧みに動かすことができる。 ・自分の好きな遊びや、好きな遊びの仕方をする。	・自分で考え、行動したり年下の園児に声を掛けたりして、年長になった喜びや自信を感じる。 ・年長になった遊びや活動に積極的に参加し、手を足を入れ、巧みに動かすことができる。 ・自分の好きな遊びや、好きな遊びの仕方をする。	・手を叩いたり、自分で描いたりして遊ぶ。 ・年長の遊びや活動に興味を持ち、一緒に遊ぶ。 ・自分で描いたりして遊ぶ。	・保育者に安心感をもち、できたことを喜ぶ。 ・年長の遊びや活動に興味を持ち、一緒に遊ぶ。 ・自分で描いたりして遊ぶ。	・2回連続したことを自分で繰り返して遊ぶ。 ・年長の遊びや活動に興味を持ち、一緒に遊ぶ。 ・自分で描いたりして遊ぶ。	・使いたい玩具を自分で選んで遊ぶ。 ・年長の遊びや活動に興味を持ち、一緒に遊ぶ。 ・自分で描いたりして遊ぶ。	・友達と一緒に遊ぶ。 ・年長の遊びや活動に興味を持ち、一緒に遊ぶ。 ・自分で描いたりして遊ぶ。	・友達と一緒に遊ぶ。 ・年長の遊びや活動に興味を持ち、一緒に遊ぶ。 ・自分で描いたりして遊ぶ。	・友達と一緒に遊ぶ。 ・年長の遊びや活動に興味を持ち、一緒に遊ぶ。 ・自分で描いたりして遊ぶ。
5月	・保育者に安心感をもち、安定的な気持ちで過ごす。 ・走り回り、体を動かす。 ・身の回りのことを自分でできた喜びを感じる。	・自分のやりたい遊びを見つけて楽しむ。 ・走り回り、体を動かす。 ・自分の好きな遊びや、好きな遊びの仕方をする。	・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・道具の置き方や組み合わせを考え、遊びを楽しむ。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・道具の置き方や組み合わせを考え、遊びを楽しむ。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・一人で遊べるようになる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・一人で遊べるようになる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・一人で遊べるようになる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・一人で遊べるようになる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・一人で遊べるようになる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・一人で遊べるようになる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。	・一人で遊べるようになる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。 ・友達や先生と一緒に戸外で体を動かしながら遊ぶと楽しいと感じる。

⑤小学校との連携、接続

幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るためには、幼児教育、小学校教育を相互に理解し、見通しをもって教育課程を編成して教育、保育に当たることが大切である。教育・保育要領や「幼保小の架け橋プログラム」等に示された内容を踏まえ、「10の姿」を子どもの成長を連続して捉える視点として就学先の小学校と共有し、接続期の園教育の充実を図った。5歳児が多く就学する熊本市立の小学校2校と協力し、協議の場をもった。

小学校教育と幼児教育では、「10の姿」の捉え方に開きがあることから、4年次は、幼児の育ちを捉える視点として、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に関わる卒園児の育ち（表6）」を園で作成し、事前に小学校の各担任が記入したものを基に協議を行った。この表は、育ちの姿を具体的に捉える視点として有効であった。学級に所属する児童の個人差や学級担任の評価規準による違いはあるが、卒園児の傾向を把握

育者に定着した。5領域のねらい、内容、活動（遊び）が連動し、ねらい（計画）⇒活動（実践）⇒評価⇒改善のサイクルが保育者に身に付き、経験の浅い保育者も取り組みやすく学びにつながるという効果を得た。これを、縦の視点（2、3、4、5歳児）の学年間から検討したものが「発達別のマンスリー・エピソード」である。同月の4学年の各領域のねらいに応じた

記載内容を1枚に配列し、比較、分析して、ねらいに応じた活動が展開されたか、学年に相応しい学びがあるか、もう少し学んでほしいものは何か、「10の姿」の読み取りは適切かの視点で考察し、教育課程と保育の改善に生かした。

④「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の育ちの過程の作成

保育記録に記載した「10の姿」を蓄積して、本園としての「10の姿」の育ちのプロセスを整理し、

することができた。また、5歳児の実践事例をまとめ、紹介した。以下、協議の内容である。

「10の姿」等から見て、本園の卒園児が育っていると思われる点として、いざこざがあっても友達と話し合っ解決しようとする、グループで話し合っ学習することに意欲的である（協同性）、「～したい、自分の役割を果たしたい」という意欲があり、工夫することができる（自立心・思考力の芽生え）、草花や虫が好きな子どもが多く、特徴をよく知っている（自然との関わり・生命尊重）、友達が褒められると一緒に喜び、一人でいる友達を遊びに誘っている（道徳性・規範意識の芽生え）などの育ちが挙げられた。育てるべき点として、見通しをもって自分から行動すること（自立心）、自分がどうしたいのかを言葉で伝える力（何に困っているかを伝えると誰かが助けてくれ、そのことが人間関係づくりにつなが

る）、相手の気持ちを受け止め、折り合いをつけること等に個人差がある（道徳性・規範意識の芽生え）、整理整頓（健康な心と体）などの基本的な生活習慣が挙げられた。

また、園では「考えたり試したりする」ことを重視しており、育ちが見られたが、小学校からは十分に育っていないという評価であり、保育の中で考えたり試したりすることと小学校の学習の中で必要とされるものに違いがあるのではないかと、育ちを促す活動はしているが深める援助が十分ではないと受け止めた。課題として挙げられた事項については、指導計画や保育に反映させながら育てている。学びの連続性を図るために、園の保育を啓発し、さらに相互理解を深める必要があることも分かった。

2 指導方法・教材等

（1）実施した指導方法等の特徴（以下、「幼児」を「子ども」とする）

① 育ちと学びの連続を図る子ども主体の保育～「10の姿」を意識した育ちをとらえる～

教育・保育要領では、「主体的・対話的で深い学び」即ち、子ども自らが見通しや期待をもって活動したり、他者との関わりを深めながら自分の思いを表現し、試行錯誤したり考えを出し合っ協力したりしながら考えを深める活動が重視されている。保育者も教育課程に基づいた保育、子ども主体の保育を心がけ、育ちを「10の姿」の視点からも読み取っ指導に生かしてきた。意図的な環境を構成し、子ども一人ひとりの発話や発想、子ども同士の関係性に目を向け、育ちを読み取っ育ちを確かなものにすることに留意した。以下、保育の視点である。

- (ア) 保育者が意図や見通しをもち、子どもが経験を継続的、発展的に積み上げていく保育を創る。
- (イ) 子どもの発達していくプロセスを具体的に把握し、指導計画を立てる。
- (ウ) 指導計画に、発達段階を踏まえた具体的なねらいと内容を設定し、実践する。
- (エ) 子どもの主体的な活動は、子ども自ら取り組む活動、環境を構成して促す活動、保育者の導入によって促す活動など多様であるが、何れにおいても子どもの主体的な活動として展開されるように適切な援助を行う。
- (オ) 子ども一人ひとりの思いや体験の積み重ね、学びや発達の姿を「10の姿」の視点で読み取り、指導計画に反映させるカリキュラムマネジメントを行う。
- (カ) 子どもの豊かな体験を促し、子どもが自ら主体的な活動を展開していくような環境を構成し、子どもの姿から育ちや思いを読み取り、適切に援助する。

（2）指導方法等は適切であったか

4年次は、表8（3（1）③）の学年テーマを設定し、4園で保育に取り組んだ。その中から、3歳児

表6 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に関わる卒園児の育ち

本園卒園児の各項目の育ちの様子について、A～Eのあてはまるところに○をつけてください

- A：卒園児のほぼ全員が育っている
- B：多くの卒園児が育っているが、あまり育っていない卒園児もいる
- C：半数程度の卒園児が育っている
- D：一部の卒園児は育っているが、育ちが不十分な卒園児が多い
- E：卒園児のほとんどの育ちが不十分である

10の姿	項目	A	B	C	D	E
健康な心と体	・体を動かすことが好きで、いろいろな運動遊びに目標を持って挑戦する					
	・活動や時間に見通しを持って行動する					
	・基本的な生活習慣が身に付いている（椅子に正しい姿勢で座る、後片付け 食事のマナー等）					
	・危険な行動をせず、安全に気を付けて生活する					
自立心	・人に頼らずに、できることは自分でする					
	・自分で考え、自分で判断して行動する					
	・自分に自信を持って行動する					
	・あきらめずに最後までやりとげようとする					
	・生活や活動などに必要なものを 自分で考えて用意する					
協同性	・友達と同じ活動に参加し、みんなで一緒に楽しむ					
	・相手の気持ちを考えながら、友達のためにあげようとする					
	・人の意見を聞き、取り入れようとする					
	・協力ができる					
道徳性・規範意識の芽生え	・自分の役割に責任を持って取り組む					
	・思い通りにならなくても気持ちを切り替えて取り組む					
	・トラブルになっても折り合いをつけ、話し合っ解決しようとする					
	・友達の気持ちを考え行動する					
規範意識の芽生え	・園生活に必要なきまりや遊びのルールの大切さがわかり、守ったり自分でルールを考えたりしようとする					
	・したり言ったりしてはいけないことがわかり、しない					
	・無駄な使い方をせず、物を丁寧に扱う					

の実践、小学校への接続を意識した5歳児の実践について述べる。

① 3歳児の保育 ～身近な草花や虫と親しみ、自然の不思議さや面白さ、特徴に気付く力を育む～

育ちの連続性を図るために、2歳児、4歳児の担当と体験や学びについて協議した。子どもが遊び浸り、進んで活動に取り組む中で、自然の不思議さや面白さに気付き、考える力や表現する力、人とかかわる力などが総合的に育まれるように、実態を踏まえて意図的に環境を構成し、子どもが主体的に活動に取り組み、活動を深化、発展していくような適切な援助を行うことを心がけた。2歳児で経験した桑の実遊びやダンゴムシ集めの経験を踏まえてねらいを設定し、活動を展開した。その活動の一部を記載した。

【色水をつくって遊ぼう！】（7月4日～）

7月のねらい：身近な生き物や植物に親しみ、面白さや変化などに気付きながら関わりを深める。

活動のねらい：園庭の草花を使い、自分なりに考えたり試したりして遊ぼうとする。

5歳児がオシロイバナで色水をつくっていることに興味をもったツキが、真似て色水をつくり始めた。ピンクの色水をつくり、この日をきっかけに他児も色水遊びをするようになった。保育者は、花壇の近くに、台やカップ、ビニル袋、すり棒等を置いた。オシロイバナと水をペットボトルに入れてよく振るときれいな色が出ることが分かったヒカりは、うまくできないカノンのペットボトルに手を添えながら「こうやってするといいよ。いっぱい振るんだよ」と教えていた。色水遊びを繰り返すうちに、自分なりに花や水の量を試すようになり、花が多いと色が濃くなることに気付いた。ユウナが「ブドウジュースできた」（濃い色水）、コウキは「イチゴジュースできた」（薄い色水）と見立てると、他児も、色水をジュース、皿に載せた砂に花を飾ってケーキにしてお家ごっこをして遊ぶようになった。他の草花も摘んで色水をつくり、色が出る草花（マリーゴールド、アサガオ、ヨモギ）と出ない草花（白色オシロイバナ、ニチニチソウ）があることや、草花によってできる色が違うことに気付いたようで、色が出る花を集めるようになった。また、年長児の姿を見て、すり棒やすり鉢を使うと色が出ることや漏斗を使うと水が入れやすいことにも気付いた。

コウミは、色水が入ったペットボトルに日差しが当たると色の見え方が変わることに関心、「ピカピカした！」と何度も試した。周りの子どもも一緒に試して「ほんとだ！」「きれい！」「キラキラした！」と色の変化の美しさや驚きを共有する姿が見られた。さらに、色水を使ってにじみ絵をしたり、花を染めた和紙で魚や花火をつくったりと遊びが広がった。



<10の姿につながる学び>

- ・色水をつくったりごっこ遊びに使ったりして、草花を遊びに取り入れる。 (自然との関わり・生命尊重)
- ・年長児の遊びに興味をもち、真似たり一緒に色水をつくったりすることを楽しむ。 (一緒にしようとする)
- ・様々な草花を使い、自分なりに試して花が多いと色が濃くなること、草花によって色水の色が違うこと、色が出る花と出ない花があることなどに気付く。すり鉢やすり鉢、漏斗の便利さを感じる。 (自分で試そうとする)
- ・自分が気付いたことや感じたことを言葉で伝える。 (言葉で伝えようとする)
- ・色水をジュースに見立てたり、日差しに当たった色水に美しさを感じたりする。 (豊かな感性と表現)

<考察>

初めて色水をつくった日、ツキは、振り返りで元気に手を挙げて、皆の前に出てつくった色水を見せながら話した。色水遊びの楽しさや色水ができた喜びを味わったことが伺われ、その姿を見て他児も色水遊びに引き付けられたようだ。色水をジュースに見立てる活動を広げるためにカップや皿を十分な数用意し、遊びの場をそのまま残したことで遊びが継続し、子ども同士でやり取りしながら楽しむ姿が見られた。子どもが扱いやすいスプレー容器と和紙を用意したことで、色水でにじみ絵をする遊びに広がった。このように

用具や教材といった環境の再構成により遊びが広がり、草花や色水の不思議さや面白さを味わうことにつながった。

【コガネムシ！】（8月3日）

8月のねらい：身近な生き物や夏ならではの自然物などに親しみ、面白さや不思議さなどに気付き、関わりを深める。

活動のねらい：身近な生き物を見たり触れたりして関わり、親しみをもつ。

コウミが「カナブン見つけた！」と声を上げると、ハルとケイマが駆け寄り、手の平に載せて3人で見ていた。やがて、ハルとケイマが虫の取り合いを始めた。保育者が「引っ張ると虫も痛いと思うよ」と話し掛けると、コウミが「痛いよ」と返し、ケイマも「ごめんね、ご飯あげる」と言って、落ち葉を虫の口に運んだ。「パクパクしてる」「食べた」とコウミとハルは喜んだが、ケイマは、「（落ち葉）なくならん」と呟き、3人は図鑑で調べ始めた。年長児のクワノスが、虫が載っている箇所を教え、「同じ緑色」「同じキラキラ（斑点）がついてるね」と捕まえた虫と同じ体の色と斑点がある虫を指さした。保育者が「コアオハナムグリって名前だよ。コガネムシの仲間よ」と伝えると、「カナブンじゃない？」「コガネムシ？」「コガネムシ！」と驚いた。さらに、図鑑を見ていたケイマが「あっ、花食べよる」「何の花だろう？」と話していると、クワノスケが「どこで見つけた？」と尋ねた。コウミが花壇を指差し、3人は花壇に走って向かった。ニチニチソウを見て、「この花なんじゃない？」「これだね」と言って、虫が入った飼育ケースに花を入れた。その後も、3人は虫を探した。ケイマは、「カナブンおった！」と大きな声を出して知らせ、また図鑑を見始めた。図鑑と捕まえた虫を次々に見比べていると、「あった！」と声を上げた。保育者が虫の名前（コフキコガネ）を読むと、「これも、コガネムシ！」とさらに声を上げた。



<10の姿につながる学び>

- 虫に食べ物が必要なことに気付き、優しく関わる。
虫の様子や特徴に気付いたり図鑑で調べたりして関心をもつ。 **（自然との関わり・生命尊重）**
- 気付いたことや疑問に思ったことを言葉で表現したり、友達と簡単な言葉のやり取りをしたりする。
（言葉でのやり取り）
- 虫について知りたい時には図鑑で調べることが分かり、自分で調べる。 **（思考力の芽生え）** **（自立心の芽生え）**
- 自分が知りたいことを一緒に調べてくれる年長児に親しみを感じる。 **（協同性の芽生え）**

<考察>

ケイマは虫に興味があり、虫を探している年長児の後を追って探したり、一緒に図鑑で見たり、自分で図鑑を調べる姿がよく見られた。年長児の手助けはあったが、自分たちで虫の体の色が緑色、金色の斑点があるといった特徴を捉えて、調べる姿に感心した。保育者が調べている子どもの姿を見守ったことで、年長児が手伝い、自分たちで疑問を解決することに繋がった。また、子どもにとって難しいこと（今回は、文字を読むこと）は、保育者が子どもの知りたい気持ちを見逃さずに援助した。

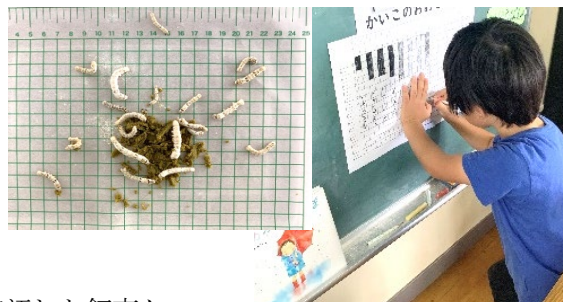
カナブンと思っていた虫が、コガネムシという虫であったことは、驚きとともに新たな発見になった。保育者は子どもが自分でやってみようとする姿を見守り、子どもたち自身での解決が難しい時に援助したり子どもが知りたい情報を提供したりすることが自立心やの思考力芽生えを育む上で有効であることを実感した。その後もケイマは、土の中から出てきた幼虫や散策で摘んだ草花に、「これ、何だろう？」と疑問をもち、図鑑で調べる姿が見られた。

② 小学校教育の基盤となる5歳児の保育 ～連続性を意識して～

幼児教育では、子どもが様々な環境に出会って興味や関心を広げ、疑問や課題をもって遊びに取り組み、うまくできなくても諦めずにさらに考え、工夫して自分の発想を実現する経験、他者と協同して遊ぶ経験を重視している。その過程での学びが、小学校以降の教育につながると考えている。

小学校教育への見通しをもつために、5歳児の保育者は小学校1年生の学習指導要領や教科書に目を通して、幼児教育での子どもの活動やそこでの気づき、「10の姿」から見た学びが小学校のどの教科等につながるのかを考えることに取り組んだ。しかし、決して小学校教育の前倒しや準備教育を行うことではない。

事例は、カイコを飼育して幼虫が変化する様子を観察し、図鑑や絵本で調べたり、カイコの幼虫の家を作ってどの色が好きか試したりしながら、カイコへの愛着を深め、紙芝居づくりや糸とりで発展した活動である。カイコは、短期間に成長して変化がよく分かり、子どもたちの好奇心や探求心を高め、子ども主体の楽しい関わりが期待できる素材である。4園とも、6月から8月にかけて、カイコを育てる活動に取り組



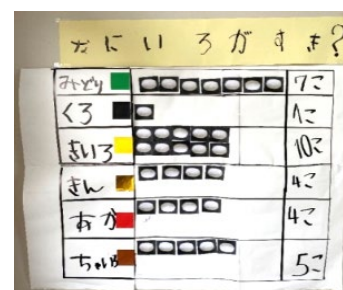
カイコの体長を調べて、マス目を塗る。

んだ。飼育箱を用意し、人工飼料で育て始めた。エサやフンで汚れた飼育ケースの掃除のために、保育者は、ケースの底に目盛りとマス目が書かれたまな板用の抗菌シートを敷いた。子ども達に、幼虫の体長に気付かせたいと考えたからである。ツムギは、「四角の上に乗ってる」「ここに数字が書いてある。3の所にいるけん、3センチなんじゃ?」と、シートの目盛りの数字を読み、マス目の数を数え始めた。マス目の数でカイコの大きさがわかる事に気が付いてからは、少しずつ大きくなるカイコを見て「今日は4個ぐらい!」と、毎日シートを見ながら大きさを確かめるようになった。「先生、大きさ書いて」と言うリノの言葉から、シートのマス目を自分たちで塗りつぶして記録を取るようになった。



カイコは何色が好きか、色紙を部屋に張って調べる

右図は、カイコは部屋の中に入って繭をつくることや、好きな色があるらしいことを絵本で知った子どもたちが、カイコの家を作ってどの色が好きかを調べて表にまとめたものである。段ボールの仕切りに子どもたちが色紙を張って、カイコが繭を作っていく様子を毎日観察した。



繭を作った部屋の色毎に、表を表す

一連の活動を、小学校の教科等への接続の視点で捉えると、「カイコの体の長さを測って調べる」「各色の部屋に入った繭を表にして比べる」「カイコの幼虫の大きさや卵の形を比べる(思考力の芽生え、数への関心・感覚)」ことは、長さや量、ものの形の特徴を知る「算数的な活動」、「カイコの幼虫を、観察しながら大切に育てる」(自然への関心・感覚、生命尊重)ことは、生き物に親しみを持ち、大切にしようとする「生活的な活動」「特別な教科 道徳」、「カイコの幼虫の家をつかって、どの色が好きか調べる(思考力の芽生え)」ことは、遊びに使う物を工夫して作り、その面白さや自然の不思議さに気付く「生活的な活動」につながると捉えた。

保育者が、保育を通した育ちや学びが小学校にどのようにつながるかという見通しをもって意図的に環境を用意したり場を捉えて援助したりすることが、学びの連続性を図る上で有効に働くと考える。

3 教職員の資質向上への取組

時間シフトで動く幼保連携型認定こども園では、研修時間の確保と保育者の資質向上が課題である。保育者の転出入や多様な勤務形態のため、保育力向上に向けた取組の経年の積み重ねが難しく、保育者の経験差や力量差があるという課題がある。本年度は、次のことから資質能力の向上に取り組んだ。

(1) 保育改善に繋ぐ研修会、研究保育

① 研修形態等の工夫

(ア) Zoom を活用した on-line による研修会の実施

(イ) 学年別研修会、合同研修会の工夫

- ・学年別研究会は0・1歳児、2歳児、3歳児、4歳児、5歳児の期日を分けて、短時間でいった。
期日を分けて実施することで、各園の保育に支障が出ない、短時間の研修で4園の共通理解、共通認識を図ることができる効果があった。
- ・合同研修会は、各園2～3名の参加し、参加者が研修内容を園に復講する。新期採用者研修（1年目、2年目）を年度初めに実施し、研究開発の取組の共通理解を図った。

(ウ) 研究総括や講師が各園に出かけての園内研修を行う。

(エ) Web サイト（イントラ）の活用：マイドライブに、教育課程、4園の指導計画、研修記録、指導案、エピソード記録、マンスリー・エピソード、参考資料等を掲載。

② 研究保育への取組

今年度は、学年毎にテーマを設定し、各園の発想を生かした保育を展開し、研究保育等で保育を見合っ
て改善につないだ。

表8 令和5年度 各学年のテーマ

学年	学年テーマ
2歳児	見たり聴いたり触ったり、様々な体験を通して好奇心を育む ～様々な自然素材に触れて、遊びを楽しみながら～
3歳児	自然に親しみ、不思議さや面白さ、特徴に気付く力を育む ～草花や虫に関わり、遊びに取り入れながら～
4歳児	自然に関わり、友達と試したり工夫したりする力を育む ～土・砂・水などの自然物を遊びに取り入れ、遊びを発展させることを通して～
5歳児	主体的に関わり、考える力や表現する力を育む ～水・光・影・太陽など身近な事象と関わる遊びを通して～

【研究の視点】

- 子どもたちが主体的に活動したか。
- 教育課程を意識し、ねらいと内容に応じた活動が展開されたか。（ねらいと内容の適切性）
- 活動を通して、豊かな学びが得られ、ねらいが達成されたか。（「10の姿」の観点から）
- 環境構成、保育者の援助は、子どもの主体性や学びを促すものであったか。

(2) 可視化した保育記録「エピソード記録」「マンスリー・エピソード」への取組

子どもの育ちを個人に焦点を当てて読み取り、考察した「エピソード記録」と月別指導計画のねらいに沿った実践を可視化した「マンスリー・エピソード」を作成し、カリキュラムマネジメントに生かした。それを基にカンファレンスを行うことで教育課程及び「10の姿」の育ちを意識した保育実践や保育者のきめ細かな子どもの読み取りにつながった。発達別のマンスリー・エピソードは、縦の視点（2、3、4、5歳児）から指導計画や保育を見直し、改善に有効であった。

(3) 研究発表会の実施：令和6年2月23日（金）公開研究発表会を実施し、研究成果を発信する。

II 実施の効果

1 幼児へ効果

5領域の視点から教育課程を編成し、ねらいに沿って保育を計画し、子どもの姿から「10の姿」の育ちを読み取って保育改善に生かしてきた。それにより、子どもが、意欲的・主体的に取り組み、遊びを楽しみながら友達との関係を深めたり、自分で考えたり工夫したりしながら活動や学びを広げ、深める姿につながった。

その学びを「10の姿」から捉えると、「自分が選んだ遊びに、身体を伸び伸びと動かして取り組んでいる。運動に目標をもって取り組む子どもが増え、達成感や充実感を味わっている。生活や遊びに見通しがもてるようになり、生活習慣が身に付いてきた」（健康な心と体）、「興味をもった事について『なぜ?』

『こうしたらいんじゃない』などと自分なりに考えて試すことや、失敗した理由を考えて工夫することを楽しんでいる。図鑑やタブレットで調べて、分かる喜びを味わった」（思考力の芽生え）、「昆虫や多様な植物に触れ、自然物を使って工夫して遊ぶことを楽しみ、不思議さや面白さを感じている。大切に育てる気持ちや態度が育ち、気付きや遊びを広げている」（自然との関わり、生命尊重）、「絵本やお話から興味を広げ、経験や思いを言葉で表現することを楽しみ、発想を広げている。子ども同士の対話を大切にしたことから、言葉で伝える力が育ってきた」（言葉による伝え合い）、「異年齢の友達との関わりから思いやりや優しさが育ってきた」（道徳性・規範意識の芽生え）等の具体的な姿が見られた。

3つの資質・能力の視点から見ると、「思考力・判断力・表現力等の基礎」の育ちが最も高く、子ども達が遊びや生活の中で、自分で発見したり、試行錯誤や工夫をしたり、表現に工夫や創造性をもって取り組んでいることの表れであると捉えた。また、想像した通りにならなかったことを不思議に思い、なぜ失敗したのかを考え、工夫しながら遊びを発展させる姿や、もっとよいものにしようと話し合っ工夫する姿に育ちが見られた。「知識や技能の基礎」の育ちとして、鉄棒や登り棒に繰り返し挑戦してうまくできる体の動かし方を体得する、種の数や幼虫の長さを調べて表に表す、どの場所の土から一番硬い泥団子ができるかを見付ける等、遊びを通して自然物の性質や身体の働きに関する知識を身に付けることができた。体を動かす遊びにおける目標の達成度も高い。安全に関する知識や自分の行動への見通しについては個人差が大きく、保育の工夫が必要であった。「学びに向かう力」に関しては、自分で選んだ遊びや友達と決めた目的に取り組む、達成感や充実感を味わうことが次への意欲につながった。日常的に展開される友達や異年齢児との温かい関わりから、思いやる心が育っている。

2 教師への効果

研究を通して、「教育課程を意識した保育」「ねらいを意識した保育」「活動や学びを広げる環境構成と援助の工夫」「一人ひとりの学びに目を向けて子どもの育ちと課題を読み取る力」「子どもの主体的な活動の理解と主体的な活動を促す保育」等の向上が図られた。

教育課程の理解、指導計画との関係、子ども理解から始めた研究であったが、子どもが楽しんでいる姿に満足していた保育が、教育課程のねらいや内容を理解して子どもの学びや育ちを捉え、ねらいを達成するための適当な援助や環境構成、再構成を工夫する保育に変容した。1歳児以上の教育課程は、5領域からねらいと内容を設定した。これによって、教育課程に基づいて指導計画（月案⇒週案⇒日案）を立案し、ねらいを意識して保育を行い、それを評価して翌月（週、日）の指導計画に生かすカリキュラムマネジメントが定着してきたと言える。また、担当する学年だけでなく、他学年や系列園の指導計画や保育実践に目を通し、学びの連続性を意識して保育を行うようになった。それとともに、教職員間に気軽に相談し合う風土が広がったことも成果である。子どもの主体性と保育者の意図とをバランスよく絡ませることはまだ課題があるが、主体的な活動への理解が進み、「こんなことをしたい」「ここまでしたい」という子どもの活動意欲や活動目標を高め、主体的な活動を促す保育が展開されるようになった。育てる力の見通しをもって、ねらいが達成されたかどうかを振り返ることで子どもへの関わりが変わり、活動や学びが深まることを保育者自身が実感している。

可視化した保育記録（エピソード記録、マンスリー・エピソード）への取組により、「10の姿」の視点で育ちを読み取ることが日常化し、子ども一人ひとりに目を向けて「学び」や「育ち」の姿を記録し、個人と全体の育ちを捉えるようになった。「10の姿」の捉えも、「言葉のやり取りがあったから『言葉による伝え合い』」と短絡的に当てはめていたものが、年齢相応かと考えて評価するようになった。保育者の自己評価にも「研究を重ねるごとに、教育課程を念頭におき、子ども達の主体性を大切にしながら保育に取り組めるようになってきた。子どもの主体性を考えることで、集める保育ではなく、集まる保育を実現できるようになった」「教育課程や『10の姿』を意識して保育に取り組んできたことで、子どもに対する見方が変わった。自分の保育を俯瞰して見るようになった」といった感想を挙げている。

また、指導計画の形式の変更や研修時間の工夫等は、負担軽減につながった。

3 保護者等への効果

子ども施設向け ICT システム「コドモン」、保育参観、懇談会、ふれあい帳（毎月、個人の育ちを保護者に伝えるファイル）で、研究開発に関する取組や保育を発信してきた。また、初年度より、全保護者を対象に「心と体の育ちに関するアンケート」（53項目：内、情意面の育ち14項目）、年長児保護者を対象に「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』の育ちのアンケート」を実施した。保護者から「何かに取り組むときはどちらかという受け身で、上手くできないとやる気も無くしがちでしたが、年長になると自分でダンボール工作を率先してやり、どうしたらより良くなるかを考えながら作業する様子が見られました。難しい作業も諦めずやっていてやり遂げる力がついたように感じます」といった感想が寄せられ、研究に関する取組が家庭に広がり、よい影響をもたらしていることが伺われた。アンケート自体が、保護者啓発や子育て支援につながっていることも伺われた。

Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた教育課程の編成

(1) 0歳児から5歳児の連続性を図った教育課程の編成、指導計画、保育実践

0歳児から5歳児、5歳児から小学校へのつながりに留意して教育課程を編成した。編成した教育課程について、育てる資質・能力の連続性の視点からさらに省察し、保育を通して改善を図る必要がある。コロナ禍の影響で不十分であった地域や保護者との連携を深め、共に子どもを育む社会に開かれた教育課程とする。子どもの姿は多様であり、月齢や発達による個人差も大きい。編成した学年の教育課程は、育ちの方向を示すものとして子どもの実態に応じて弾力的に取り扱っているが、小学校への接続を考えた時、一人ひとりの子どもに基盤となる力を育むために、それぞれの年齢で育てたい力の系統性と見通しをもち、指導計画具体的な保育の充実を図る必要がある。

エピソード記録、マンスリー・エピソードへの取組は保育者の資質・能力を高める上で有効であるため継続し、0歳児、1歳児にも可能な限り広げて育ちと学びの連続性の視点から考察を加える。

生活や遊びのルールは理解しているものの夢中になると忘れる、他者を受け入れられず自分の気持ちを通そうとするなど情意面の育ちに課題が見られるため、保育の方法や保育者の関わりを工夫するとともに保護者と連携して取り組みたい。

(2) 小学校への連続性を図る保育、学びと育ちをつなぐ小学校との連携

5歳児は、幼児期に遊び込んだ体験や学びが小学校にどのようにつながるかを意識して保育を行い、「10の姿」と小学校の教科等へのつながりから子ども成長を捉えてきた。しかし、園での学びが小学校の学びへ本当につながっているのかの検証は難しい。就学先の小学校の1年生担任等と視点をもって協議を行った際に出された意見は参考となるものであり、幼児教育に生かすことのできる内容であった。今後、アプローチカリキュラムを明確なものにして、幼保小間で子どもの学びの接続性の視点での話し合いを重ね、円滑な接続が図られるようにする必要がある。就学先の小学校は多岐に渡るため、園の教育課程や保育の充実と小学校への啓発が「幼保小架け橋プログラム」の実現につながると捉えている。

2 教職員の資質向上について

教育課程、各指導計画（月案、週案、日案）の連動、連続が浸透し、ねらい、内容を意識した保育や、保育を評価してねらいや環境構成、援助の改善を行うカリキュラムマネジメントが、保育者に定着した。しかし、翌日、翌週、翌月の指導に関する改善に留まり、教育課程の改善に生かすことに個人差が見られた。実践を持ち寄った保育カンファレンス等で省察することが、研修意欲を高め、保育力の向上に有効であったことから、取組を継続して保育力の向上を図る。

「学びは、全体ではなく個に成立しなければならない」、個に焦点を当てた保育記録で「10の姿」からの育ちを読み取ってきたが、特別な支援を要する子どもを含め一人ひとりの子どものウェルビーイングの向上を目指し保育改善に取りみたい。